

# 晴れの日にも雨の音

unamu

雨の音が聞こえる。

外は晴れていて、空が眩しいくらいなのに。

それでも、僕の心にはいつだって、

あの日の雨の音が聞こえるんだ。

君が旅立ちを決めたのは、

随分と前から知っていたし、

僕にいつ言おうか迷っていたのも分かっていたけれど、

ご覧の通り、僕は女々しかった。

君の夢を応援するふりをして、

本当は君の言葉にひどく怯えていたんだ。

君は雨を撮るのが好きで、

そんな君を見るのが僕は好きで、

ずっとずっとそんな日々が続いて欲しかった。

けれど、  
君がレンズ越しに見ていたのは、未来だった。  
僕がのぞいても、そのレンズにはきっと、  
何も見えやしなかつただろう。

君が選んだ日は、やっぱりというべきか雨の日だった。  
しかも土砂降りの大雨で、  
まるで僕の心みたいな夜だった。

君の希望が詰まった黄色のトランクを見るだけで、  
僕にはもう充分過ぎた。

「何も言わなくて、いいよ」  
それが精一杯の僕からの強がりのセリフだった。  
君の顔を恐る恐る見た僕に、君は微笑んだかと思うと、  
リビングの窓を思いっきり開け放った。



雨は家の中に一気に入り込み、  
フローリングはすぐに水浸しになって、  
カーテンは今にも夜空へ飛んでいってしまうかのように、  
バタバタと勢いよく揺れていた。

立ち尽くす僕に君が何か言っていたけれど、  
僕は、雨と風の音で微かにしか聞こえない君の声を、  
さらに聞こえなくするために、  
濡れるのもお構いなしに窓に近づいた。

君は少し驚いた顔をして、大笑いしながら、  
そのまま出て行ってしまった。

僕だけが取り残された空間では、  
カーテンがより一層、自分の存在を主張していた。  
君について行きたかったのかもしれない。

そんなセンチメンタルな発想をしてしまったのは、  
君が気に入っていた雨模様だったからだろうか。

それから、ふと君がいないことを思い出して、  
僕の口からこぼれたのは、本音だった。

「ちゃんと、話を聞けばよかった…」

もう遅い、君には届かない。

今から追いかけたら間に合うだろうか、

なんて考えては消して、考えては消しての繰り返して、  
時間だけが無情にも過ぎていった。

最後まで、女々しかった僕と、

どこまでも美しかった君は、

結局、出会ったときと変わらなかった。

「ありがとう」なんて、まだまだ言えるはずもなく、  
君の好きだった店のブラックを飲むけれど、  
僕には苦くて苦くてたまらない。

ただ、想うのは、  
もしも雨の音がこの胸から消えるときがきたら  
きっと聞こえるはずなんだ。

あの日、聞かなかった、君のさよならが。

